よきおとずれ
CATHOLIC NAGASAKI MONTHLY
カトリック長崎大司教区報

発行所　カトリック長崎大司教区 広報委員会
発行人　大水文隆
〒852-8113 長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL095(843)3869 FAX095(843)3417
郵便振替番号01880-5-2699
カトリック長崎大司教区ホームページ
http://www.nagasaki.catholic.jp
印刷所　株式会社　藤木博英社
〒850-0852　長崎市万屋町5-13
TEL095(821)2146 FAX095(821)2148

みことばとともに
わたしはあなたに知恵の道を教え、まっすぐな道にあなたを導いた。
箴言4章11節

教皇さまの意向のために祈りましょう
①一般：移住移動者の家族、とくに母親
②宣教：平和な未来
③日本：殉教者の記念とあかし

各部の取り組み

信仰年からシノドスへ

第2バチカン公会議開幕50周年と『カトリック教会のカテキズム』発布20周年を記念する日から始まった信仰年も、4カ月が過ぎようとしている。信徒発見150周年を2年後に控え、その準備となる教区シノドスへ向かって全教区民が共に歩むために、各部の取り組みを3人の部長に語っていただいた。

共に祈ることから
教会奉仕者等養成部

山脇 守師

2014年の長崎教区シノドスへ向けて、11年から始まったシノドス準備期間中に、新たに昨年10月から今年11月までの信仰年が加わりました。この信仰年期間はシノドスに向けての最終準備段階という最も重要な時期となります。それは、シノドスに提出する提言の草案作りの時期だからです。この草案作りがうまくいかなければ、シノドスは教区の単なるスローガン作りに終わってしまう可能性があります。そのために、このような時期に信仰年を送るのは、み摂理ではないかと思っています。なぜなら信徒皆さんが、自分の信仰をあらためて振り返り、加えてシノドスのために祈ってくださるきっかけを与えてくれているからです。これはきっとシノドスの成功のために神さまがくださった大きな恵みの時だと信じています。

そうした恵みを背景に、教会奉仕者等養成部は信徒の皆さんから回収したアンケートの分析に入りました。それは「教会奉仕」の観点から、〝信徒がこれからの長崎教区に何を望んでいるのか〟を読み取るためです。そこで、教会奉仕者等養成部は、召命促進委員会、神学生養成委員会、教会奉仕者養成委員会の3つの委員会からなっていますので、この3つの委員会に関連するアンケート設問に特に注目しました。そして、そこで見えたのが、「司祭の減少、それに神学生や志願者の召命の減少についての不安」でした。また、その解決につながることとして、「信徒の自覚と、司祭と信徒の協力」が何より重要であるということでした。現在、司祭、修道者の平均年齢は、以前に比べ非常に高くなっています。ところが、神学院や修道会に入る子どもたちや青年が、毎年わずかというだけでなく、皆無の修道会さえあります。こうした危機的状況をまず自覚し、あらためて司祭と信徒がお互い協力し合って、この大きな問題にあたらなければなりません。

そこで教会奉仕者等養成部は、各教会に「召命のための祈り」を熱心に唱えていただくこと、そして青少年が教会奉仕に関心を向けることで召命にも関心を持ってもらえるのではないかと考え、神学院からの教会訪問を増やしたいと思っています。それを通して、神学生と一緒に典礼奉仕をしてくれる青少年を増やしていただきたいと願っています。それに加え、神学院でも〝召命に関心のある子どもたち〟に勉強を教えたり、要理を教えたりすることができないかを検討していきたいと考えています。まずは司祭、信徒が共に祈ることから始めることです。そして、そこから何か大きなものが見えてくるのではないかと思っています。その点をシノドスに提言したいと考えています。

分岐点に立つ我々
信仰養成部

山川 忠師

2015年に、大司教区は信徒発見150周年を祝う。加えて、この機に、教区代表者会議を開こうとしている。再出発を期してのことだが、その準備に信仰養成部は取り掛かり、先のアンケートの分析に入っている。

■どれが信仰年の光か

紙上で、「長崎はなぜ長崎を棄てるのか」が連載されている。これに関して私見を述べてみたい。

「普遍的な」というのがカトリックの意味である。その名の通り、カトリックは正統性、普遍性を追究する。だったらタイトルに「長崎」を持ってくる必要があっただろうか。真正面に来るのは公文書であって、「なぜ公会議公文書を棄てるのか」がいいと思う。

目をつぶると懐かしい、かつての長崎が甦る、とある。それはそれでいい。だが、信仰年は過ぎ去った長崎を懐古するためではない。行き詰まった信仰生活を打開するためであり、バチカンが願っていることは、第2バチカン公会議の公文書とカトリック教会のカテキズム研修なのである。2冊が信仰年にあって我々を照射する光なのであって、光源を間違ってはならない。

だから、「信仰年」の連載を組むというのであれば、どこかで公文書が引用されるべきである。主眼となすべきは公文書なのである。信仰養成部は昨年5月の総会の折、小教区レベルでできる学習法をご紹介申し上げた。

■アンケートにあったお叱り

まず、今回のアンケートにご協力を賜り、感謝を申し上げたい。皆様から届いた疑問には数々あったが、その一つに触れる。

「宗教は救うものなのに、救ってはくれない。宗教のことで家庭はかき回される。家庭が円満であるために、できるだけ『宗教』には触れないようにしている。やれ主日のミサ、やれ要理の勉強、やれ殉教祭、やれ献金、強いることばかり、他のどの宗教にこんなに強いているところがあろうか。宗教という殻を脱ぎ捨てた方が安らかにいくのではないか」と反問している。目を通している中に、私は岩波の『ナメクジの言い分』を思い起こしてしまった。著者によると、持ち家幻想を脱し、生きていくために、殻を棄ててしまったカタツムリ、これがナメクジだ、という。

殻をまとったカタツムリと殻を脱ぎ捨てたナメクジ、双方が私たちの現況を映し出してくれる。さて、どうすべきか、分岐点に立つ我々を照らしているのが、第2バチカン公会議公文書ではないか。

私たちは今どこにいて、どこに向かっているのでしょうか
福音化推進部

紙﨑新一師

私たちは今、信仰年を通して信者一人一人の信仰の立ち位置を確かめ、教区シノドスによって長崎教区が向かう信仰の未来を築こうとしています。その答えを見いだす鍵となるのが「第2バチカン公会議（以下、公会議）」。教会の現代化（aggiornamento）をテーマに、典礼の現代化から始まった議論は、キリストが教会の隅の親石であったことをあらためて確認し、キリストのことばに耳を傾け、その響きが全世界に伝わるよう、すべてのことに仕える者として向き合う姿勢を示しました。減して始まる革命とは違う、仕えて再興する教会の刷新、公会議は現代世界の諸問題にも言及し、世界との対話が始まりました。

分かれたキリスト教の信者を兄弟と呼び集う教会一致運動（エキュメニズム）や諸宗教との対話。社会の貧困、抑圧、差別、戦争、内紛で苦しむ人々に目を向け、善きサマリア人のように奉仕する活動。そのような諸問題の解決のためにキリストの平和の担い手として粘り強く働き掛ける活動。これらすべては、公会議により具体的なものとなっていきました。今日、これらの活動を含め、私たち信者一人一人がキリストの福音を生き、社会が福音で満たされていくことを「福音化」といいます。

長崎教区は、2001年この福音化を目指して活動委員会を設立し、教区の組織作りを行っています。福音化推進部も教区シノドスの準備期間である第4期活動計画（11年度～13年度）の中で、原点をキリストに置き、向かうべき方向を教会と社会の福音化と定め、仕えることによってキリストとつながり人々がつながる対話の道を準備し進めています。その具体的な例が、福祉委員会の福祉的奉仕を通して福音を生き社会の福音化に向けて奉仕するボランティアネットワーク作り ―ミゼリコルディア構想（『よきおとずれ』12年8月号参照）― です。しかし、これらはフレームに過ぎません。

教区シノドスに向けてのアンケートを見ると、指導的な質問と要望的な答えの文が多く、対話し共に歩む教会との距離が見えます。4択のいくつかの結果からは、福音を生き伝える使命感が全体として低いことも分かります。だからこそ、「参加し、交わり、宣教する」教会となるために、教区シノドスが必要なのでしょう。

教区の信者一人一人が教会として、その使命を生きるには「聖霊」の働きが必要です。みことばに耳を傾けながら、フレーム作りと地道な呼び掛けを続けます。

福音化フェスタ

「全世界に福音を広げる」をコンセプトに、教区福音化推進部（部長・紙﨑新一師）は1月14日、福音化フェスタをカトリックセンターで開催。フェスタでは、福音化を目指し活動している各団体の紹介とともに、東日本大震災復興支援としてチャリティー「神父さんが歌うコンサート」が実施され、会場満杯の約500人が集まった。

プログラムは、モナの会の皆さんによる歌と踊りに始まり、福音化推進部の4委員会（福祉、人権、平和推進、エキュメニズム・諸宗教の各委員会）や活動団体について委員会ごとに紹介があった。また「神父さん」たちが、笑いを誘うトークを織り交ぜつつ、自作の歌などをバンドやソロで熱演し、最後は高見三明大司教も一緒に会場内全員で声を合わせて歌い、皆、感動に包まれた。

参加者からは、「とてもよい集い。演奏も素晴らしかった」「これまで活動に参加したくてもできなかった人たちが、きっかけを得たのでは」といった声が聞かれた。当日の募金52万5千円は、大槌ベースと震災復興支援関連施設2カ所に送金される予定。

ほしかげ

潜伏時代外海にいたバスチャンは、7代先まで信仰が継承されるようキリシタンたちを励ましたという。そうすれば、ローマの教皇様から遣わされた神父が来てくれるから、それまで頑張れ、と▲それから約200年後の1865年、信徒発見があった。日本の教会を思い続けたローマカトリック教会と、教皇様から派遣される神父を待ち続けた信徒との、まさに世紀を超えた出会いだった▲今、年配の信徒の大きな悩みは、子や孫が教会から離れていることのようだ。確かに、統計上は最も多い世代なのに、小教区には50歳代前後の姿をあまり見かけない。いるけれども教会には来ていないというのは事実らしい▲同世代の神父として、何かできないものかと思案するが、名案は浮かばない。だからといって何もしないわけにはいかない。とにかく、あらゆる方向に触手を伸ばし、個人と教会との懸け橋になりたいという思いだけは持っている▲人間関係、子育て、老人介護、経済活動として仕事、さまざまな社会問題など、人間の直面する課題に教会は対峙し続けてきた。というよりも、人間そのものが教会の関心事なのだ▲ある時期から宗教全般に対する不信が日本全体に広まってしまったが、カトリック教会の本来の姿と思いを社会に向けて発信し続けることが、とりわけ大切なようだ。（S）

信仰年連載企画
長崎はなぜ長崎を棄てるのか ⑤

家族が心を合わせて祈るとき

長崎純心聖母会　Sr. 片岡 瑠美子

「雪のサンタマリア」（日本二十六聖人記念館蔵）

「雪のサンタマリア」

「雪のサンタマリア」と呼ばれる1枚の聖画が、日本二十六聖人記念館に展示されている。外海のかくれキリシタンの家に秘匿されてきたものであるが、聖画像は、高槻市で発見された「ロザリオの十五玄義図」に描かれている「被昇天の聖母」によく似ている。なぜ「雪のサンタマリア」と呼ばれるようになったのであろうか。

キリスト教が日本に伝えられた頃、教会祝日表には、ローマの「聖マリア大聖堂」を記念する8月5日が「雪のサンタマリアの祝日」とされていた。「聖マリア大聖堂」建立に際し、その場所に8月にもかかわらず雪が積もったという伝承があり、それは教会でも語られていたのであろう。外海地方のかくれキリシタンだけが伝える『天地始事（ちはじまりのこと）』には、マリアが天に向かって祈誓をかけ、雪を降らせて天に昇ると、天帝は、マリアを雪のサンタマリアと名づけられたと記されている。この話がいつの間にか、聖画の呼び名となったと考えられる。

この聖画は、小さく、素人づくりの掛け軸になっていて、黒くすすけた竹筒に収められていた。特別な日だけ取り出して壁に掛け祈っていたという。1580年に開設されたセミナリヨ（現在の小神学校）の絵画教室の生徒たちか教師によって描かれたであろうこの聖画は、400年近く命懸けで守られてくる間に損傷も激しく、それが無造作に紙を貼って補修されている。しかし、幸いにも聖母マリアのお顔と合掌した御手は無傷のままである。

「雪のサンタマリア」に祈る人々

この聖画が取り出される特別な日は、おそらく正月行事として行われていた「絵踏」の日ではなかったかと想像することもできる。

私はこの聖画の前に立つ時、1つの情景を思い起こしてしまう。

正月の絵踏のあと、薄暗く、狭い納戸の戸をしっかりと閉め、この時だけ竹筒から取り出して壁に掛けられた「雪のサンタマリア」に祈る人々。「雪のサンタマリア」は、皆の希望、拠り所であった。壁に向かってひざまずく家族皆が、肩を寄せ合って震えつつ、忍び泣きながら、魂の底から援けと慰めを求めて「コンチリサンのオラショ」（痛悔の祈り）を唱え続けるのである。しっかりと一言、一言、親は子に覚えさせるように小さく口ずさむ。

もはや祈りの対象と仰ぐものを何も持たない潜伏キリシタンは、絵踏の日だけは、唯一隠し通せたこの「雪のサンタマリア」の前で、あわれんでください、見捨てないでくださいと祈り続けたのではないだろうか。あまりにも悲しい彼らはつい、掛け軸にすがるように手を添えてしまったが、サンタマリアの尊いお顔と祈っておられるその両手には触れなかったのであろう。

香台（家庭祭壇）の前で

やがて私の思いは、我が家の香台（家庭祭壇）の前に、家族が一列に横に並んで唱えた朝夕の祈りの時間に戻っていく。

暗く狭い納戸に代わり、お座敷に集まり、黒くすすけた竹筒ではなく、床の間の半分以上を占める香台に安置されたキリストや聖母マリアのご像と燭台と花。そこに並んで祈る家族の姿。

「さあ、お祈りですよ」との父の呼び掛けで一斉に集まり、横一列に並んでひざまずく。場所はあるのに納戸の頃のように横一列。曾祖父母たちからの伝統かもしれない。上の子がろうそくに火をつけ、お祈りが終わったとき消すのは末っ子の特権であった。小さな末っ子はまだマッチが擦れなかったから。

兄たちから順に先唱して夕の祈りが終わると、父がロザリオの祈りを始める。眠らないよう精いっぱい大きな声を出して唱えるのであるから、隣家にはもちろん、通りにまで聞こえていた。これこそ、長崎のカトリックの家庭の特徴ではなかったか。納戸の中に隠れ、忍び泣くように「コンチリサン（痛悔）」を唱えていた祖先の悲しい思いを伝え聞いていた父たちは、今の自由を心から感謝して、大きな声で唱える習慣をつくったのであろう。祈りの習慣は幼いうちから身体感覚として覚えていく。公教要理は小学生のうちに全部暗誦するのが長崎の家庭教育であった。

カトリックの日本画家、故マリア・テレジア小関君子女史は、明治、昭和初期頃のカトリックの家庭の信仰生活をほのぼのと描いている。小関女史が長崎、五島を巡礼されたとき、浦上の長崎純心聖母会本部に宿泊され、絵筆をとられたとも聞く。この時の作品であろうか。長崎純心大学博物館が所蔵する3点のうちの1点が、この「香台」である。

家庭祭壇を「香台」と呼ぶのは、おそらく長崎のカトリック信徒だけかもしれない。家族そろって香台に向かう。この画家にとってそれは新鮮な情景だったのであろう。

「香台」（長崎純心大学博物館蔵）

「神父様を尊敬しなさい」

この言葉も父がしばしば口にし、自ら模範を示してくれた我が家の伝統である。否、長崎の教会の信徒の身に染みこんだ伝統であった。

杉本ゆりたち潜伏キリシタンが命懸けで「大浦天主堂」に出掛け、プティジャン神父に、わざわざ「サンタマリア ノ ゴゾウ ハドコ？」と尋ねたのは、「フランス寺」と呼ばれる「大浦天主堂の異人さん」が、7代待ち続けたローマからのパードレ（司祭）様かどうか、確かめたかったのである。

潜伏キリシタンが司祭を待っていたのは、「コンヘソーロ（ゆるしの秘跡を授ける司祭）」が派遣されてくると「コンヒサン（告白）」ができると伝え知っていたからである。

今、私たちは先祖たちが待ち望んでいたことがすべて可能な時代にいる。必要なことは、実践する意思と工夫ではないか。短くても家族で唱える祈りなど。

家族が心を合わせて祈る。聖体とゆるしの秘跡を大事にする。それゆえ司祭を尊敬する。これこそ長崎が受け継ぎ、伝えていくべき偉大な、尊い先祖から託された信仰の遺産ではないだろうか。

一人の司祭もいない長い迫害の時代に、教えられたままに聖母マリアに援けを願い、司祭を待つ心を失わなかった先祖たちに、私たちはいかに感謝すべきであろうか。

家族が心を合わせて祈るとき、互いの信仰が養われ、愛と一致が強められ（『よきおとずれ』994号・髙見三明大司教）、司祭の召命も育っていくと信じている。

2013年 キリスト教一致祈祷週間　主と共に学び祈る

合同研修・講演会

1月12日、カトリック長崎大司教区と長崎キリスト教協議会は、18日から始まるキリスト教一致祈祷週間（1月25日まで）に先駆けて合同研修会をカトリックセンターで開催し、髙見三明大司教がエキュメニズムをテーマに講演を行った。

大司教は講演の中で、初期キリスト教の成立から東西教会の分裂、さらに西方教会が宗教改革を経てプロテスタントとに分かれ今に至るまでの、歴史的な状況を説明した。「分裂から長い年月を経て、それぞれの道を歩む両者が一つになることは困難である。しかし本来教会は一つであり、同じ信仰を持った兄弟が分かれたままでいるならば、私たちは真に信仰を証しすることはできないはずだ。一人一人がこの問題に真剣に向かい合う必要があり、何よりこれはキリストの意向である」と語った。

参加者は、「（人が少なく）呼び掛けが足りなかったのでは。この期間に限らず、もっとお互い（カトリックとプロテスタント）を知る機会があるといいと思った」と感想を述べた。

長崎キリスト教一致礼拝

1月20日、カトリック長崎大司教区と長崎キリスト教協議会主催の合同礼拝がカトリック城山教会で行われた。16人の聖職者と250人余の信徒らが参加し、キリストのからだである教会の一致を願って共に祈りをささげた。

説教で、長崎キリスト教協議会議長の藤井清邦牧師は、「同じキリストを信じる私たちは信仰を告白し、同じ祈りをささげ、聖霊によって一つに集められている。キリストを通して父なる神を礼拝していくことによっていただく恵みと福音に感謝し、解釈や理解の違いを超えて、一致への努力を続けていきたい。そしてそれはどれだけ、豊かで幸せなものであるかを多くの人に伝えていきたいものだ」と語った。

交通誘導警備　常駐警備　イベント警備
（有）小田警備保障
警備員募集！
電話 095-856-6524　FAX 095-856-6523
長崎市横尾3丁目31-15　代表取締役 パウロ　小田　睦

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式
（有）栄光式典社
代表取締役　ヨハネ　西村 勇二
長崎市辻町7-18　TEL(095)844-4011
24時間営業　FAX(095)843-9896

タンスの中身は入れたまま
責任ある安全運送!!
（見積り無料・荷造り発送も致します）
貨物保険有り
・一般引越　・小荷物
・荒ゴミ捨て　・遠距離
・学生引越　・ピアノ運搬
24時間営業・年中無休
受付時間 7：00～22：00
水浦運送
シモン　水浦 幹雄
長崎市上野町12－3
TEL(095)㈹847－7151
844－1420

白蟻調査無料・駆除予防工事5ケ年保証付
白蟻防除施工士
大田白蟻研究所
代表者　マリア　大島睦子
（〒850-0811）長崎市矢の平1丁目14番15号
☎長崎 095－822－8436
FAX 095－822－8488

五島列島・教会巡礼の旅　好評受け付け中
五島列島のカトリック教会巡礼を、2日間・3日間・5日間の3プランでコース設定。現地は、巡礼バスガイドと巡礼専門の現地を知り尽くした添乗員（五島出身）が同行致します。
◆資料請求は下記へお気軽に（各プランとも3月～8月催行受け付け中）
㈱長崎ツーリスト公社　TEL 095－894－9755
FAX 095－894－9760　※土・日・祝日は休業
〒852－8044 長崎市音無町12－12－304　全国旅行業協会会員
長崎県知事登録旅行業 第2－144号　総合旅行業務取扱管理者　吉村 徳明

ご先祖に心より感謝を・・・
材石治明
長崎本店　長崎市城栄町13-1　電話（095）846-3598
大村店　大村市民霊園内　電話（0957）50-3008

司祭叙階を前にして

〝不器用な道具〟の回り道

ヨハネ　中野健一郎

神父様という存在を身近に、憧れとして意識したのは、小学3年生くらいの頃、病弱な若い神父様と出会ったときだったと思います。その神父様は腎臓の持病でかなり苦しかったはずなのに、いつも優しく熱心で、何か「神さま」を感じさせる、不思議な魅力のある方でした。

中学入学と同時に、その神父様の修道会で、志願者として定期的に修道院に通ってお世話になり、やがて会の方針のもと大学へ、修道生活へと進みました。しかし司祭職への憧れはあるものの、その修道会での生き方、自己の在り方にかなり悩んだ末に、長崎へ帰り、社会人として生活する日々を送るようになりました。

仕事をする中で辛いことも多々ありましたが、子どもたちと過ごす日々は楽しいものでした。「このまま社会人、信徒として教会に奉仕すればいいではないか」と思う一方で、なぜか種火のような思いがずっと消えません。その思いが自分勝手なものか、呼ばれているということなのか、黙想や巡礼に参加し、識別しようと試みましたが、判断しかねて、あの神父様に相談しました。答えは「やめとけ」の一言。さらに「でもこのぐらいで引き下がるようじゃ、呼ばれているとは言えないんだぞ」とのお言葉。家庭のことや自分の性格など、心配は尽きませんでしたが、ワールドユースデーでの出会い、長崎教区のある神父様や先輩方、あるシスターの勧めなどの後押しがあり、家族の賛成もあって、絶妙なタイミングで事が進み、今があるように思います。

回り道の歩みを導いてくださった神さま、祈り支えてくださった皆様方に感謝いたします。不器用な道具ですが、司祭団の一員として、信仰の遺産をより豊かにする神さまの道具として成長できますよう、どうぞお祈りくださいますように。

【略歴】1970年4月8日、長崎市生まれ。83年4月、長崎南山中学校入学。86年4月、長崎南山高等学校入学。89年4月、上智大学文学部フランス文学科入学。93年同大学卒業後、修道生活（フランシスコ会）を経て、2000年4月、長崎南山小学校勤務。07年3月同校退職。同年4月、福岡サン・スルピス大神学院（現日本カトリック神学院）入学。12年2月26日、助祭叙階。本原教会出身。

叙階・選任・認定式のお知らせ

叙階式　3月17日（日）15時　浦上教会
- 司祭叙階受階者　ヨハネ　中野健一郎（本原）
- 助祭叙階受階者　ミカエル　川端　志範（滑石）

選任式　3月2日（土）10時30分　浦上教会
- 祭壇奉仕者受任者　ヨゼフ　稲田　伸也（諫早）
- 朗読奉仕者受任者　パウロ　山内　啓輔（田平）

助祭・司祭候補者認定式
2月23日（土）10時30分　土井ノ浦教会
- 候補者　ペトロ　下原　和希（土井ノ浦）

巡回教会めぐり㉑

馬込小教区　高島（たかしま）教会

少数ながらも熱心な祈りをささぐ

1891（明治24）年現在地にフランス洋館風の教会（45坪）を建立。1926（大正15）年には信徒数90世帯590人。老朽化と手狭のため、59（昭和34）年鉄筋コンクリート造りの教会（100坪）と司祭館を新築し、山口愛次郎大司教から祝別を受ける。

61（昭和36）年小教区として認可を受け、深堀栄市師が初代主任司祭として任命された。72（昭和47）年信徒数1022人、ピークを迎える。

しかし、74（昭和49）年三菱端島（軍艦島）砿閉山、86（昭和61）年高島砿業所閉山と相次ぐ。閉山時の信徒数は150世帯414人。閉山に伴い仕事を求め島を離れる島民信徒に歯止めがきかず、89（平成元）年には信徒数70世帯140人、現在に至っては22世帯33人と激減。昨年の春にも3世帯5人の信徒が島を離れた。

毎週の主日のミサの参加者は13、4人。しかし少数ながらも自分たちの教会で、しっかりした熱い祈りがささげられている。（馬込小教区主任・岡秋美）

深堀小教区　善長谷（ぜんちょうこだに）教会

深い沈黙の中で信仰をつなぐ

善長谷教会は、全世帯がカトリック信者で深堀城山（じょうやま）の中腹にひっそりと点在している風光明媚な場所にあり、教会前庭から眼下に見える雄大な五島灘は圧巻だ。

この地の歴史は、文化年間（1804年）に潜伏キリシタンであった先祖が三重樫山から厳しい弾圧と迫害を逃れ野母半島をさまよい、この地にとどまったことに由来する。当時は、畑を耕しながら仏教徒になりすまして城山の社（やしろ）に参拝し、禁教令が解かれるまで沈黙を守り通してきた。

古い民家を教会に改造し信仰を守ってきたが、1952（昭和27）年に古川重吉師の指導により現在の聖堂が献堂された。昨年の献堂60周年にあたり、5月に記念行事が行われ、記念誌も発行された。

多い時には250人ほどいた信徒も現在は高齢化が進み、15～6世帯35人。先祖から受け継いできた信仰を、深堀小教区全体の問題として次代にどう引き継いでいくかが課題となっている。

（深堀教会・峯明夫）

巡回教会めぐりは最終回です。ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

修女連〝新年の集い〟

信仰宣言の大切さを強調

1月5日13時から、教区修道女連盟による「新年の集い」がカトリックセンターで行われた。

始めに指導司祭の三村誠一師（大山小教区）は、「信仰年」の意義と第2バチカン公会議について再確認するようにと招き、神の助けに信頼し2013年を始めようとあいさつした。講話では、高見三明大司教が信仰年に際し、①「ニケア・コンスタンチノープル信条」を唱え、可能であればラテン語で歌う②ゆるしの秘跡に頻繁にあずかる③聖体拝領のとき信仰宣言を意識し「アーメン」とはっきりと応える、という3つのことがらの実践をあらためて呼び掛けた。特に、全教会共通の言葉であるラテン語を暗記すればカトリック信者としての誇りと世界の教会との連帯を実感でき、これをもとに信仰の基本を学ぶことができると述べ、「信仰宣言」の大切さを強調した。

最後にミサをささげ、思いを新たに集いを終えた。

信徒発見150周年に向け実行委員会が発足

「信徒発見150周年記念事業実行委員会」の発足式が、1月15日（火）大司教館で行われた。

高見三明大司教は「教区全体で150周年記念事業に取り組み、福音宣教の在り方を探っていきたい。この節目を恵みの時と理解し、人間の心を刷新するような、信仰を体験する行事としたい」とあいさつした。

実行委員会のメンバーは以下の通り。小島栄（委員長）、峰徳美、久志利津男（以上副委員長）、松下光男、小瀬良明、岩村知彦、平本義和、下窄英知、大水文隆、辻原達也、岩本繁幸、汐留義和（以上司祭）、松尾勝、岩崎静一、山内茂雄、下田浩二、宮崎猛、深堀美佐子、濱崎綾子、深堀勝、水野英紀、中濱護、藤原栄、山口和彦（以上信徒）、尾上裕子、木村美由紀（以上修道者）。

クリスマスのささげ物

ミニコンサートと小さな犠牲

紐差小教区　昨年12月16日、クリスマスの準備が整った紐差教会で、コラール長崎とお告げのマリア修道会修道女ら合わせて20人、楽器演奏者6人、指揮・平本義和神父によるミニコンサートが行われた。

最近あまり歌われなくなった「カトリック聖歌」を見直そうと5人の音楽家が編曲した107曲の中から選曲した7曲と、信仰年の公式聖歌「クレド ドミネ」を披露。清らかな歌声と楽器の美しい音色に、カトリック聖歌の素晴らしさをあらためて感じるひとときとなった。

長与小教区　待降節中、教会学校の子どもたちは3つのおささげ（善い行いができたら馬小屋のイエスさまのベッドに「わら」を置く、毎日自分が行ったイエスさまの喜ぶことを書いて絵カードをツリーに飾る、献金）をした。献金2万円は12月25日、長与みかんと共に養育院の子どもたちにプレゼントされた。

ぶどう園

▼イエズス会立山修道院お知らせ　●祈りの一日　①2月7日(木)　②2月16日(土)　③2月27日(水)　④2月28日(木)　⑤3月11日(月)。10時～15時半。※②③は「聖書ほら会」。

●祈りの日々　①2月9日(土)～10日(日)　②2月22日(金)～24日(日)　③3月16日(土)～17日(日)。初日17時～最終日15時。TEL095-821-4577

▼教区シノドス・信仰年特別企画研修会　2月10日(日)13時、カトリックセンター。テーマ「信仰年」

改めて罪人を招くために来られたキリストと向き合う」。講師・森一弘司教（前東京教区補佐司教・現真生会館理事長）。参加費無料。教区家庭特別委員会主催。

▼青年黙想会　2月24日(日)9時～16時、大司教館。参加費千円。問合先・大野教会　工藤秀晃神父。TEL0956-49-3608

▼信徒発見ミサ　3月17日(日)19時、大浦天主堂。

感謝

―香典返し―

長崎カトリック神学院

●堤ヒサエ様（黒崎）

故フランシスコ　堤俊雄様

右の方からご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

マルタ　木口タマ修道女（長崎純心聖母会）

昨年12月20日、老衰のため、ロザリオの聖母修道院にて帰天。88歳。

1923年長崎市生まれ。43年就職先の会社を辞めて本会に入会。45年初誓願、54年終生誓願宣立。伊王島幼児園、佐世保（聖心幼稚園）、神崎社会館、しとね保育所、広島（清心幼稚園）、恵の丘長崎原爆ホームなど多方面で幼児教育や老人福祉に従事した。晩年は療養の日々となったが、持ち前の明るさとユーモアで訪れる人々を元気づけていた。4年前に緊急入院し、何度も危機的状況に陥りながらも奉献者として病苦を捧げた。

誓願生活67年。葬儀ミサ・告別式は12月22日、修道会本部聖堂で行われた。

マリア　黒崎ヨネ修道女（お告げのマリア修道会）

1月5日、上神崎の光の園老人ホームにて帰天。93歳。

平戸市宝亀町に生まれ、1938年生月修道院入会。57年初誓願、62年終生誓願宣立。生月修道院創立期に尽力。主に農耕、幼稚園手伝い、教会奉仕に携わる。長年院長・副院長として、地域の中で多くの方の支えをいただきながら生月修道院の充実に努める。厳しさの中にも温かさを持ち、姉妹たちを導いた。

葬儀ミサ・告別式は、1月6日山田教会にて行われた。

信仰年に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録推薦の実現を！

長崎純心聖母会　Sr. 片岡千鶴子

はじめに

２０１５年に私たちは「信徒発見１５０周年」を迎えます。高見大司教様は10年の年頭教書で向こう５年間の段階的準備について表明されており、今年は第３段階に入ります。折しも、ベネディクト16世教皇様は12年10月11日から13年11月24日までを「信仰年」とすることを宣言されました。

私は「信徒発見１５０周年」を迎える準備の時期と「信仰年」が重なったこと、さらに長崎県が推進している「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（以下「長崎の教会群等」という）の世界遺産登録実現への運動がこれに重なっていることについて、幾つかの深い摂理を感じています。そのことについて述べたいと思います。

1. 人々を「井戸（教会）に向かわせる」ために

教皇様は自発教令『信仰の門』の中で、「現代の人々も、サマリアの女と同じように、井戸に向かい、イエスのことばを聞かなければならない」と述べておられます。

「フランス寺にサンタ・マリアがおいでになるなら、そこの異人さんは、パーデレ様に相違ない。」この確信をもって浦上の潜伏キリシタン杉本ゆりたちが、「井戸（大浦天主堂）に向かった」ことによって「信徒発見（宣教師との出会い）」が実現しました。

今、長崎県は「信徒発見１５０周年」に「長崎の教会群等」の世界遺産登録の実現を目指して総力を挙げています。世界遺産登録は、「現代の人々を井戸（教会）に向かわせ」「現代の信徒発見」を実現する機会をもたらすと思います。

2.「新しい福音宣教の取り組み」のために

同じ教令に教皇様は「現代においても、信じることの喜びと、信仰を伝える熱意を再び見いだすために、教会が新しい福音宣教に強力に取り組む必要があります」と述べておられます。

私は「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録推進運動は、教会が新しい福音宣教に強力に取り組む手立ての一つとして、摂理的に用意されたと強く感じています。既に皆さんもご存じのように、長崎県は昨年10月30日、県知事が発起人代表となって「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が15年の「信徒発見１５０周年」に本登録を実現するため「長崎県世界遺産登録推進県民会議」（以下「県民会議」という）を設立、13年7月には国の推薦を得ることに総力を挙げることを満場一致で可決しました。長崎県が総力を挙げて「長崎の教会群等」の世界遺産登録推進に取り組む背景には、昨年7月21日に開催された文化庁の「世界文化遺産特別委員会」において、平成24年度の日本からユネスコに推薦する資産は「富岡製糸場と絹産業遺産群」に決定し、残念ながら「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は選に漏れてしまったことがあります。さらに、まさかの落選であったことの無念さと、目標に掲げている「信徒発見１５０周年」の登録実現には13年の推薦決定が絶対条件であることなどの切羽詰まった思いがあるのです。

私は「県民会議」の設立総会に委員として出席していましたが、カトリック信者としてとても責任を感じました。同時に先祖たちに申し訳がないと思いました。「長崎の教会群等」の資産に挙がっている教会は、先祖たちが長い潜伏と幕末・維新期の迫害のあと、「信仰の証し」として建設したものです。私たち子孫は「長崎の教会群等」を「信仰の証し」として世に示し得なかったのではないかと、強く反省しました。

3. 初代邦人長崎教区長早坂久之助司教様と教会建築

１９２８年に初の日本人長崎教区長として着任した早坂久之助司教様は、それまで内向きの性格が強かった長崎のカトリック教会を、積極的に一般社会に働き掛ける存在にするために様々な努力をされました。その一つが美しい教会を建てて人々を招くということでした。「教会は見えるしるし」であるからと、市なり町なりから一望にして仰がれる場所を選定することを重要視しておられました。今回、世界遺産の資産として挙げられている教会は、大浦天主堂を筆頭に、大正期までの木造と煉瓦造りの教会が中心です。しかし、昭和期になりますと美しい鉄筋コンクリート造の教会が佐世保、平戸と、特に県北を中心に建立されています。これらの教会は早坂久之助司教様が美しい教会を建てて、「人々を井戸（教会）に向かわせたい」と願われた福音宣教の見える証しです。長崎教区は浦上の潜伏キリシタンの「信徒発見」にとどまらず「現代の信徒発見」を実現する使命を担っていることを、早坂司教様は遺言として残されたのかもしれません。

4.「長崎の教会群等」が世界遺産登録推薦候補になった経緯について

最後に「長崎の教会群等」の世界遺産登録推進運動について、簡単に経緯を振り返ってみます。世界遺産は「世界遺産条約」に基づいて加盟している条約国から推薦された資産を、ユネスコが審査して「世界遺産一覧表」に登録されることによって成立します。

その手順を日本の場合で説明しますと、政府は将来登録推薦を行う意思のある資産の目録をユネスコに登録するため提出します。これを「世界遺産暫定リスト」といいます。この「暫定リスト」に登録されていることが、本登録推薦の条件です。

２００６年から暫定リストの資産決定を地方自治体の申請を受けて追加資産とする新しい制度が始まりました。長崎には既に県内の数多くの教会の意義に着目した研究者たちが設立した「長崎の教会を世界遺産にする会」がありました。長崎県はこの研究の成果を素地に申請書を提出することになったのです。全国から24件の申請書が文化庁に提出され、翌年1月23日に「世界文化遺産特別委員会」の審議が行われ、4件が選定されてユネスコの「暫定リスト」に推薦新規登録されました。その中の1件が「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」であり、しかも24件のうち唯一のカトリック教会関係資産だったのです。新聞・テレビが大々的に報道し長崎県は喜びに沸き、カトリック教会も喜びのコメントを発表しました。以来、厳しい「世界遺産登録基準」に適うための資産の検討を重ねながら本登録に向けての申請書作成を進めてきていたのです。

日本からユネスコに本登録を申請できる資産は、1年に1件の定めになっており、選定はさらに競争が厳しくなると予想されています。その意味でも今年は「長崎の教会群」の本登録を決する正念場の年になったのです。私は「信仰年」の意義ある年に「長崎の教会群等」の本登録推薦を勝ち取ることは、教皇様が望んでおられる信仰を伝える熱意を再び見いだすために、教会が新しい福音宣教に強力に取り組むことの証しになると信じ、長崎大司教区の皆様の応援を心から願っています。

世界遺産登録に向けて

シンポジウムで大司教講演

長崎の教会群とキリスト教関連遺産の世界遺産登録に向け、ＮＰＯ法人世界遺産長崎チャーチトラスト（福地茂雄会長）は昨年12月22日、長崎市の中町教会でシンポジウムを開催した。

開会あいさつの中で長崎県の中村法道知事は、信徒発見から１５０年目となる２０１５年の本登録に向けて、まず必要な13年度のユネスコ（国際連合教育科学文化機関）への政府推薦獲得のため、県民一体となった協力を呼び掛けた。

講演では、高見三明大司教が、ザビエルの平戸渡来から信徒発見までの長崎のキリスト教史を紹介し、長崎が当時の日本においてキリスト教の中心地的な役割を果たしていたことを説明した。続いて、韓国文化財庁文化財委員会委員の金正新（キムジョシン）氏が、日中韓の教会建築それぞれの特色を比較しながら長崎の教会群の魅力を語った。

新刊良書

★現代カトリシズムの公共性　訳著＝岩本潤一

本書は、カトリック教会が現代の諸問題についてどう発言しているかを考察する。例えば、昨年山中伸弥教授がノーベル生理学・医学賞を受賞したiPS細胞研究については、本書第2章「ＥＳ細胞とiPS細胞」に詳しい。司教団が声明を発表した裁判員制度への関わり方や、ヨハネ・パウロ2世とベネディクト16世の教導職についても詳しく紹介される。「信仰年」の学びのためにぜひ一読をお勧めしたい。訳著者はカトリック中央協議会主任研究員。

知泉書館、４２００円。

★★★

★『ヨブ記』を読みなおす　著＝山内清海

「わたしはこの著書で、表現できないほどの苦しみや災いの中で、ヨブが神とどのように対峙したかについて考えなおしたいのです。わたしたちも、災難や不幸にあえぎながらも懸命に生きようとするとき、必ず『果たして神は存在するのだろうか？』『神は何処に存在するのか？』という深刻な問題に悩まされるからです」（「はじめに」より）。

著者は長崎教区司祭。

聖母の騎士社、５２５円。

声の奉仕会・マリア文庫　２０１３年度　受講生募集

―ボランティア活動を希望される方―

講習内容　音声訳（朗読）・校正

講習期間　4月～11月まで　毎週水曜日 10時～12時

講習会場　長崎市立図書館 新興善メモリアル会議室2

申込期間　3月4日(月)～15日(金)

申し込み・問い合わせ　電話で　声の奉仕会・マリア文庫　長崎市橋口町5・18　かなえビル1階　TEL ０９５・８４７・５１３４（10時30分～15時30分）

＊運転・館内活動（ダビング・録音・貸出・パソコン・手芸など）をしてくださる方も募集しています。

長崎県ミュージアム連携促進事業モデル事業
外海地区を端緒とするキリスト教文化とミュージアム
第1回リレー講座「ふるさと外海と五島列島」（仮題）
【日 時】2013年3月3日（日）13:15～16:00
【会 場】新上五島町　鯨賓館ホール
【内 容】講演 ほか
講師：中村　満師（長崎巡礼センター理事長）
川田正勝氏（ド・ロさまの家代表）
＊参加費無料・お申し込み不要
【主 催】
外海地区を端緒とするキリスト教文化とミュージアム協議会〔事務局：ド・ロさまの家〕、長崎県
【問い合わせ先】
長崎県文化振興課　TEL 095 - 895 - 2762

主の平安
株式会社 五島式典社（斎場）五島中央会館 奈留会館
代表取締役　ヨゼフ　浦　昭
24時間営業
五島市上大津町 1385番地1　TEL (0959) 74－5551　FAX (0959) 74－5552
五島市奈留町浦 1899－1　TEL (0959) 64－3101　FAX (0959) 64－3102

マイホームの美容と健康に！
（有）山川塗装
有限責任中間法人　全国住宅火災防止協会
長崎県建物営繕工事業協同組合理事
代表取締役　ペトロ　山川　進
佐世保市原分町1715-5
TEL(0956)49-3330　FAX(0956)49-8729

石碑　納骨堂　墓地工事　墓地分譲（高尾・本原 他）
長崎石彫（ながさきせきちょう）
ヨゼフ　岩永　博明
☎(095)862-2469
長崎市梁川町 6-17　岩永ビル

当社オリジナル商品
一筆箋（教会編）定価350円（税込）
各種印刷物のお見積もり無料です。お気軽にご相談下さい。
九州印刷株式会社
代表取締役社長 トマス　川原　保夫
〒852-8103 長崎市緑町4-5
TEL(095)846-6844　FAX(095)846-6845